報告３

近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ

森 理恵　　日本女子大学家政学部

日本研究の方はあまりいらっしゃらないと思いますので、まず初めに、キモノに関する研究動向を少しご紹介して、その後、「近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ」という本題を述べたいと思います。はっきりとした結論にたどり着かず、思いつきを並べたようなことになってしまうかもしれませんが、お許しください。

１．着物の研究動向

最初に研究動向について、私の語学能力の限界で集められたものだけですが、ご紹介します。

⑴英語文献、韓国語文献、日本語文献

キモノに関するまとまった形での英語の書籍というと、これまで長い間、Liza Dalbyという方の本しかありませんでした。この人は芸者研究――芸者が着ているキモノ、キモノを着ている人は芸者というようなスタンスで研究されていて、日本の研究者からすると疑問が多くありつつも、キモノに関するまとまった英語の本がなかったので、よくDalbyさんの本が引用されるという状態が続いていました。その後2014年に、Terry Satsuki Milhauptさんというアメリカの研究者の*Kimono: A Modern History*という本が出ました。私が見落としているものもあるかもしれませんが、これが初めての、キモノについての英語の本格的な研究書かと思います。タイトルには「Modern History」と入っていますが前近代もカバーしていて、キモノの生産、流通、消費、美術品としてのキモノまで、目配りよく研究された本であると思います。

学術的ではない部分も含まれているかもしれませんが、近年はキモノ・ブームで、2015年ごろから英語のキモノの本が多数出されています（資料３－１）。*KIMONO: The Art and Evolution of Japanese Fashion*は、ヴィクトリア＆アルバート博物館の学芸員のAnna Jacksonさん編集のコレクションの紹介で、美術品として鑑賞するキモノという視点です。Manami Okazakiさんの*Kimono Now*は現代のキモノの消費動向です。Sheila Cliffeさんの*The Social Life of Kimono: Japanese Fashion Past and Present*は歴史的な面もカバーしつつ、キモノが社会のなかでどのように位置づけられているかというもので、近年はいろいろ出ています。

現在、“Kimono Refashioned”という展覧会がアメリカを巡回しています。京都服飾文化研究財団とアメリカのサンフランシスコ・アジア美術館が組んでやっている展覧会です。こちらはキモノ展というよりは、キモノ的な日本のモチーフが、どうハイファッションの世界に取り入れられたかという内容です。

雑誌論文の世界ですと、ファッション研究では*Fashion Theory*が有名な雑誌かと思います（資料３－２）。2017年の論文は別の雑誌ですが、残りの三つは*Fashion Theory*に掲載されたもので、さまざまな視点でキモノがそれなりに研究されているかと思います。Stephanie Assmannさんの2008年の論文“Between Tradition and Innovation: The Invention of the Kimono in Japanese Consumer Culture”（*Fashion*

資料３－１　キモノに関する研究動向①英語文献

書名	編著者	発行年	出版社
Kimono	Liza Dalby	2001	Vintage
Kimono: A Modern History	Terry Satsuki Milhaupt	2014	Reaktion Books
KIMONO: The Art and Evolution of Japanese Fashion	Anna Jackson	2015	Thames & Hudson
Kimono Now	Manami Okazaki	2015	Prestel
The Social Life of Kimono: Japanese Fashion Past and Present	Sheila Cliffe	2017	Bloomsbury USA Academic

資料３－２　キモノに関する研究動向②英語雑誌論文

タイトル	著者	発行年	掲載誌
Between Tradition and Innovation: The Invention of the Kimono in Japanese Consumer Culture	Stephanie Assmann	2008	*Fashion Theory* 12 (3)
Was Fashion a European Invention?: The Kimono and Economic Development in Japan	Penelope Francks	2015	*Fashion Theory* 19 (3)
Dillute to Taste: Kimonos for the British Market at the Beginning of the twentieth Century	Akiko Savas	2017	*International Journal of Fashion Studies* 4 (2)
Digital Kimono: Fast Fashion, Slow Fashion?	Jenny Hall	2018	*Fashion Theory* 22 (3)

Theory 12(3)）は、きもの着付け学院と趣味で着物を着るサークルに入って参与観察をした、文化人類学的な研究です。Penelope Francksさんの2015年の論文 “Was Fashion a European Invention?: The Kimono and Economic Development in Japan”（*Fashion Theory* 19(3)）は、ファッション論としてキモノを取り上げています。Akiko Savasさんの2017年の論文 “Dillute to Taste: Kimonos for the British Market at the Beginning of the twentieth Century”（*International Journal of Fashion Studies* 4(2)）は、イギリスの市場におけるキモノということで、歴史研究的なものです。Jenny Hallさんの2018年の論文 “Digital Kimono: Fast Fashion, Slow Fashion?”（*Fashion Theory* 22(3)）は和装業界に焦点を当てた研究です。英語圏ではさまざまな視点から、キモノについて研究されています。

韓国語の論文は１件しか発見できていませんが、『大衆叙事研究』27号に掲載されたイ・ファジンさんの「キモノを着る女性――植民地末期のカルチュラル・クロスドレッシングの問題」（2012年）という論文があります。韓国の人が好むと好まざるとにかかわらずキモノを着るという状況が植民地期にあったわけですが、それについて論じたものです。女優さんや有名人などが、わざと政策的な理由でキモノを着せられた事例などを取り上げている論文です。この論文と私が後半で取り上げたいことは関連しています。

日本の状況を見ると、英語圏より日本のほうがあまり進んでいない印象です。日本のキモノ研究では、江戸時代のものが美術品として研究されていて、もちろん一般書はたくさん出ていますが、学術的に現代のキモノを取り上げた研究は、実は日本ではあまりなされていないという現状です。

雑誌論文ですと、卒業式などのレンタル衣装に着目した研究や、キモノの構造をもう少しこうすれば着やすいといった作り方の工夫のような論文など、いくつかはあります。しかし、まとまったかたちでの研究はそれほど盛んではないという現状です。

⑵なぜ今、キモノを着るのか？

次に、現代においてキモノを着るということについて考えます。ここにいるみなさんも洋服を着ていますし、わざわざキモノを着る人は少ないと思います。では、どういう場合に着るのか。コスプレなのか、あるいは先ほど話があったように、一種の制服なのかもしれません。たとえば卒業式に、みんながキモノに袴を着ているなかに洋服で行くのはかなり勇気がいります。「面倒くさいな」と言っていて、聞いてみると必ずしも袴をすごく着たいわけではない学生さんもいますが、「この格好以外で卒業式に行くのが無理」という状況です。「はれのひ」問題もありましたが、振袖がないと成人式に行けないということでした。べつに洋服で行けばいいのですが、行けない。これは一種の規範というか、何でしょうか。また、超党派の和装振興議員連盟というものもあります。こうした現状があります。

さらに、「きものde銀座」という毎月第何何曜日の何時にキモノを着て銀座に集まりましょうみたいな同好会もあるそうです。誰でも参加できるらしいですが、このような活動もあるのが現在のキモノの状況かと思います。

私はかつて、卒業式や成人式などの特別な機会ではないときにキモノを着る人に、「なぜキモノを着るのか」についてインタビューしたことがあります。それほどたくさんの人にはインタビューできませんでしたが、これにはいくつか理由がありました。私が興味深いと思った理由の一つとして、「洋服中心社会のおしゃれ競争に疲れてしまって、そこから降りたい」というときに、キモノで新たな活路を見出すという答えがありました。キモノがそういう役割を果たす場合もあることがわかりました。もちろん全員で

はなく、ナショナリズムの発露として着ている人もいたのですが、それとは関係なく、現在の社会の規範から逃れる手段と捉えている人もいて、そこは少しおもしろいかなと思いました。

上海の写真館で、結婚記念写真を撮るときに、洋服も選べますが、キモノも選べるというサービスをしているところがあります。さらには京都に行って記念写真を撮ることもできますということです。中国に限りませんが、日本ではないところでこうしたサービスも現在では多いようです。

2. 近代日本の国家主義・帝国主義とキモノ

ここからメインのテーマについてお話しします。

(1)「キモノ」という用語の変遷 ── キモノの女性化・日本化

まず言葉の面で「キモノ」という言葉自体について考えてみます。もともと「着るもの」という意味なので、わりと近年まで、「着物」といったときには洋服も含めた着るもの全体を指すという言葉遣いをしていたと思います。それが20世紀の間にだんだん「和服」の意味に変わっていきます。現在では、あまり「着るもの全般」の意味で「着物」という言葉を使わないと思いますが、少し前までは「着物を着替えてきなさい」と言ったら、それは「和服を着る」という意味ではなく、単に「パジャマを服に替えなさい」というような意味であったりしたと思います。

それが変わっていったのは、外国語の「キモノ」の逆輸入ではないかと私は考えています。西洋から見たときに、日本で着るもののことを「キモノ」と言っているので、日本の民族衣装、日本で着られているものが「キモノ」だということになって、その言葉が逆輸入されて和服の意味になったのではないかと思います。

ポイントとしては、その逆輸入されるときに、西洋におけるキモノのイメージがくっついて逆輸入されて現在の日本のキモノになっているということです。そこで女性化と日本化が起こっているのではないかというのが、私の考えです。

たとえば「チマ」という韓国語があります。韓国語では「チマ」はスカート全般の意味ですが、日本語でカタカナで「チマ」というと、ハンボク（韓服）の中のスカート状の服を指しますね。日本語で「チマ」といったときには、洋服のスカートは指さない。それと同じようなことで、外国語で「Kimono」といったら、服一般のことは指さないと思いますが、日本語では服一般を指していた。ですから「チマ」と同じかたちだと思います。

日本語の「着物」はもともとは着るもの全体の意味なので、もちろん女性でも男性でもみんな着ていたわけですが、先ほど出てきたような芸者イメージのようなところで、女性のほうにぐっと偏ります。さらに、日本のものですから当然日本化があって、そのため「キモノは女性が着るものであり、日本を表すものである」という女性化と日本化が、キモノという言葉が和服の意味で日本語に定着するときに起こったのではないか。それは意外と20世紀半ば、いわゆる大日本帝国下、総動員体制期以降ごろに起こったのではないかと考えております。

「きもの」という言葉が洋服の意味でも使われている例は、探せばたくさんあります。たとえば中原淳一の『きものノ絵本』です。ひらがなで「きもの」と書いたときに洋服を意味する例はたくさんあります。逆に、『美しいキモノ』という雑誌が現在でもありますが、カタカナで「キモノ」と書いたときには和服を意味することも多いです。そのあたりも外来語だった痕跡を残しているのではないかと考えています。

(2)写真と文学からみる大日本帝国下のキモノ

続いて、大日本帝国下のキモノについて、写真と文学から見てみたいと思います。大日本帝国下はいろいろあって、もちろんこれだけではありませんが、私の集められた範囲で、台湾と朝鮮と東南アジアという順番で見てまいります。

●台湾

1910年代に、台湾の中国系の中・上流階級の人がキモノを着て記念写真を撮っている例があります。結婚記念写真や、人名録用の顔写真にキモノを着て写っているという例が見られます。もちろん常日頃そのような格好をされていたわけではありませんが、記念写真的な場合にキモノを着られている例があります。Joseph R. Allenさんが “Picturing Gentlemen: Japanese Portrait Photography in Colonial Taiwan”（*The Journal of Asian Studies* 73(4): 2014）という論文で紹介されています。

また洪郁如さんの論文「植民地台湾の「モダン

資料３－３　1944年に台湾の先住民の村のようすとして紹介された写真

『大東亜戦争と台湾青年――写真報道』朝日新聞社、1944年、53ページより引用

ガール」現象とファッションの政治化」（伊藤るり他編『モダンガールと植民地的近代』岩波書店、2009年）では、台湾の陳進という女性画家が日本の帝展で入選したときの新聞記事にキモノを着て写っている例が載っています。ですから台湾の知識階級、中・上流階級の人たちは、いつもではありませんが、日本と関係するような場面とか、社交着というのでしょうか、そのような位置付けでキモノを着ることがありました。陳進さんが描いた絵はキモノを着ている女性ではなく、中国の伝統的な衣装を着て楽器を弾いている絵で入選しています。

洪郁如さんの同じ論文では、1937年頃の皇民化運動期に、知識階級ではなく一般女性がコスプレとしてキモノを着て写真館で記念撮影をした例が載っています。コスプレをしている台湾の一般女性の例です。

1944年に朝日新聞社から出された『大東亜戦争と台湾青年』というグラフ誌のなかの写真が『台湾女性史入門』（人文書院、2008年）に取り上げられています。それを見ると、台湾人海軍志願兵の母親は中国風の服装をしていて、足は下駄を履いています。妻はキモノにモンペに足袋に草履というスタイルでグラフ誌に撮られています。

さらに『大東亜戦争と台湾青年』には、台湾の先住民族の村を訪ねたというページがあります（資料３－３）。それを見ると、どこまでやらせなのかわかりませんが、洗濯をしている場面など、浴衣のような、キモノのようなものを、女性や子どもが着ています。足ははだしです。また機織りをしている写真では、機織りをしている人は浴衣のようなものを着ています。一緒に写っている子どものうち一人は中国風の服装をしていて、もう一人は中国風なのか洋服なのかよくわかりません。もう一人一緒に写っている男性は、私たちが今日想像するような、台湾先住民族の民族衣装を着ています。

同じページには、家の中で蓄音機でレコードを聞いている先住民族の方たちも写っています。日本式家屋で、ほとんどの方がキモノ・スタイルです。こうした服装が1944年のグラフ誌に台湾先住民族の姿として写されています。

これらをどう捉えるかということですが、さまざまな意味があります。現在の私たちがキモノというと、「日本の象徴」とか「ヤマト民族の民族衣装」であるという捉えられ方が多いかと思います。しかし、1910年代の台湾の例や、沖縄で着られたようなキモノというのは、日本の象徴というよりは、洋服まではいきませんが、「大日本帝国下における一種の近代服としてのキモノ」という側面があるように思います。もちろんそれだけではなく混ざり合っているとは思いますが、「日本のものだから着よう」というよりは、一種の近代服としてのキモノという側面もあったのではないかと考えています。

文学の例としては、呉濁流の『ポツダム科長』という作品があります。光複後に日本語で書かれて台湾で出版された有名な小説ですが、このなかにキモノのことも出てきます。主人公は女学生ですが、これは回想です。

> 学校では顔の洗い方から着物の着方まで習ってきたが、いざ和服を着けてみると自分でも変な気持がするのであった。しかも女学生仲間から、「あれごらん、あの人、改姓名よ。あんな着方、おかしいわね」と陰口を叩かれることもあった。
> (呉濁流『泥濘に生きる――苦悩する台湾の民　呉濁流選集 第2巻』社会思想社、1972年、189-190ページ)

ここでの女学生仲間というのは、日本人だと思います。非常にせめぎ合っている状態が見てとれるかと思います。

> 停仔脚をはじめ空地という空地はほとんど日本人の投げ売りの店で埋められていた。古いものばかりで新しいものはほとんど見当たらない。なかにはきれいな和服もあるにはあるが、彼女は今さらそれを見ようとしなかった。田舎から出てきた百姓たちは安い安いと言って屑物まで買っていった。
> (同、191ページ)

日本の敗戦後に日本人が引き揚げていく際にキモノを投げ売りしますが、この主人公は見る気にもならなかったということが書かれています。

> 薫英は玉蘭と同じカモメ会会員で、特別看護婦時代いっしょに香港へ派遣されたことがある。(中略)しかし、時代は彼女の心境を一変させた。毎朝神棚の前で祈り伏す彼女ではあったが、神棚が撤去されると共に孫中山先生の肖像を掲げて拝むようになった。それで彼女もいつのまにかモンペを棄てて美しい旗袍に着換え、いわゆる光復姿で日本兵のかわりにわが国の兵隊さんといっしょに歩くようになった。
> (同、202ページ)

これは軍国少女だったお友達が、光復後にモンペから旗袍(チーパオ)に着替えたという場面です。

●朝鮮

朝鮮では、1930年代後半に撮られた金鐘泰という男性画家の写真の例があります(資料3－4)。金惠信さんの『韓国近代美術研究――植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』(ブリュッケ、2005年)に掲載されています。写真に写っているうち、金鐘泰がモデルとした女性や描いた絵は韓服を着た

資料3－4　1930年代後半の画家・金鐘泰とモデル
『韓国近代美術研究――植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』ブリュッケ、2005年、116ページより引用

状態ですが、金鐘泰自身はキモノを着て写っています。これはこの人が親日派であったというわけではなく、留学生が大日本帝国下の日常着として着ていたキモノだと思います。

在日本大韓民国民団のグラフ誌に載っている1930年代後半や1940年の写真でも、総力戦下でキモノを着るように強制されたということもあるので複雑ではありますが、洋服や韓服、キモノが入り混じって着られている姿が見られます。分けることはできず、ごちゃごちゃ混ざり合っている姿ではないかと思います。

韓国の小説の例として、韓国近代小説の父とされる李光洙の『無情』があります。羅蕙錫（ナヘソク）をモデルにしたと言われる日本の音楽学校に留学しているビョンウクという女性が、かっこよく登場する場面があります。そのときにキモノを着ています。「ある日本服の若い婦人」というかたちで颯爽と登場する場面に、留学生だったということで日本服という表現が使われています。

次は崔曙海『二重』という短編小説です。この小説はなかなかいわくつきで、朝鮮語で発表しますが、検閲で削除されてしまいます。削除されて見られないはずが、総督府の資料の中に日本語訳が載っていたので、現在の私たちは日本語で読むことができるという非常に皮肉な結果になった短編小説です。

この小説は、京城の日本人町に主人公の一家が引っ越してきて、隣の日本人のおばあさんと一緒に妻がお風呂屋さんに行きます。すると「朝鮮人は入らせない」ということで差別を受けて、妻が泣いて帰ってきた。その続きです。この主人公は怒って、「自分は入ってみせる」と言って出ていきます。すると友人に出会います。

> ふと向うから浴衣掛けで風呂帰りの友人に出逢った。
>
> おい君は何処へ行くかと言われて、風呂へ行くのだ、今し方こんな目に逢わされて妻が泣いて帰って居るから、俺が仇討をする意味で入浴して見せる、もし二の句の三の句のと言ったら承知しない考なのだ。
>
> ああ、君、駄目だ駄目だヨボは風呂へ入れないよ、日本羽織に下駄を穿いて行けば入れるが、白衣の人は入れないよ。（後略）
>
> （『近代朝鮮文学日本語作品集（1901〜1938）創作篇１』緑蔭書房、2004年、202ページ）

白衣の人というのは、ご存じのように、朝鮮の人を象徴する使い方です。それに対して日本羽織や下駄、浴衣が対照されています。

張赫宙「追はれる人々」も紹介します。これは日本の農民と朝鮮の農民が対照されるかたちです。

> 村を去った者達の小作地は、それらの黒い着物を着た見慣れない農民達に依って耕された。頬かむりをして、青い股引をはいて、着物のお尻をめくって、立ち働いた。・・・・・・・・・・・。昌洞イ等が村を追はれたやうに、彼らも自分たちの故郷の土地を××××農民だった。
>
> 新来の農民とは全然交渉がなかった。そこの農民が殖える毎に白衣の農民が間島に流れた。
>
> （『近代朝鮮文学日本語作品集（1901〜1938）創作篇３』緑蔭書房、2004年、128ページ）

日本の農民は黒いキモノや頬かむり、青い股引、「キモノの尻をめくって」という記述が出てきますが、それに対して朝鮮の農民は、白衣の農民です。検閲があるので××になったり、書き方も「朝鮮の」とは書かないで、象徴的に「白衣の農民」というかたちになっています。そういうときに衣服が使われているということです。

次に金聖珉の「半島の藝術家たち」を紹介します。これも日本語小説で、すごくかっこいいモダンガールの女性が出てきますが、これは朝鮮人です。朝鮮人女性が酒場でかっこよくキメているというシーンに、断髪やキモノというものが出てきます。

> 酒場マロニエ――
>
> 暎姫はここへ来て、名前も日本風にツバキと改め、一躍クヰンになってしまった。
>
> （中略）「素晴らしい恰好ぢゃないか、新鮮な魅力が、湧いて来たね、浮気者はまたついうかうかと岡惚れでもしやうと云うもんさ、ははは」
>
> 場所柄、洋秀は歯切れのいい日本語をしゃべりながら、断髪に和服姿の暎姫を珍しそうに見上げ見下げした。
>
> （『近代朝鮮文学日本語作品集（1901〜1938）創作篇4』緑蔭書房、2004年、286ページ）

●東南アジア

東南アジアについては、『ジャワ・バル』（龍渓書舎、

資料３－５　『ジャワ・バル』の表紙

倉沢愛子解題　南方軍政関係史料８　『ジャワ・バル［復刻版］』より引用

1992年）を取り上げます。これはジャワ新聞社という朝日新聞社系列の新聞社が、1943年から1945年までジャワで発行していたグラフ誌です。最初はインドネシア語と日本語のバイリンガルでしたが、だんだんインドネシア語だけになっていきます。

『ジャワ・バル』にはいろいろな表紙がありますが、キモノが出ているものもあります。日本人女性がキモノを着て、現地の女性と遊んでいる写真や、ジャワの要人の娘さんや妻――スカルノの妻に東条英機の妻が贈ったキモノを着せている写真などが使われています。ジャワの人にキモノを着てもらって、日本の歌を歌ったり踊ったりするイベントを開いたという記事も掲載されています。

このような状況で、日本の象徴としてのキモノというものが色濃く出てきました。日中戦争～アジア太平洋戦争期、総動員期、1937年以降ぐらいから、だんだん日本の象徴としてのキモノというものが強まってきて、『ジャワ・バル』に至ってはっきり出たという気がしています。軍政下で、融和政策というか宣伝のために、キモノが日本を象徴する美しいものとして扱われていることがわかりやすく出ている例かと思います。

シンガポールで1943年に書かれた小山いと子「南方通信（昭南にて）」を紹介します。

> 着物を着て街を歩いてゐたら、「白昼日本の着物を着て歩いてはいけない。特殊の女とまちがへられるから、国辱である。」といふ意味の忠告を受けた。日本の女が日本の着物を着て日本の占領地帯を歩いてなぜいけないのであらうと考へて見たが解らない。（中略）傍をマレーの女はサロンを穿き、印度の女はゆるやかなサリを着け（中略）
>
> 日本の着物が美しく見えないことは天津や北京でも経験したことを思出した。
>
> （『日本婦人』1943年3月号、34ページ）

日本のキモノで歩いていて怒られたという場面です。これはご存じのとおり、東南アジアでキモノを着ている人といえば、からゆきさんだったわけです。19世紀の終わりから、東南アジアでキモノを着ていたのはからゆきさんなので、そのイメージが根強く残っていて、このような言説になって表れていたと考えられる、キモノのまた別の側面です。

まとめ

張小虹さんの『フェイクタイワン――偽りの台湾から偽りのグローバリゼーションへ』（東方書店、2017年）という興味深い本にも書いてありましたが、日中戦争以降、アジア太平洋戦争期の台湾で、中国風のボタンや襟はやめなさいと命令を出したり、日本風を強制していく時期がありました。そこでキモノの奨励、強制や、『ジャワ・バル』のような対外宣伝に使用される。それと裏表で、植民地文学のなかでは、もちろん日本批判の文脈で使用されます。また最後にご紹介したように、からゆきさんに代表されるような芸者イメージとしてのキモノというものも根強くある。規範というのかわかりませんが、さまざまなキモノの状態が時期とともに混じり合いながら少しずつ移っていく様相を見ることができるのではないかと思っています。

それをうまく理論化して、すっきりまとめられるところまではまだいっていません。思いつきのような段階ですが、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

■質疑応答

和崎聖日（司会）　近代日本におけるキモノの展開、キモノを通してどのようなことが見えるかを考えた、たいへん興味深いご報告をどうもありがとうございました。それでは、事実関係等について、いかがでしょうか。

酒井啓子　台湾にしても朝鮮にしても、現地の人たちがキモノを着る際に、誰がどういうルートで売っていたのでしょうか。それとも、現地で作っていたのでしょうか。前者の場合は、日本から輸出、売っていたのでしょうか。というのは、庶民が手に入る金額ということになると、現地で作っていないと手に入らないですよね。

森理恵　羽二重などは朝鮮でも生産していますが、反物を輸出していたのがほとんどだと思います。

酒井　それは市場原理に則って輸出していたのか、それとも積極的に推奨して売っていたのでしょうか。

森理恵　朝鮮の場合は、在朝鮮日本人がいますので、三越などたくさん着物屋さんは朝鮮にありました。向こうにいる日本人向けのキモノということですが、それだけではなく、カフェの女給さんや朝鮮人の人もそういうものを着ていました。台湾もそうだと思います。東南アジアについては、からゆきさんと一緒について回って、行商のような形で、反物を売って歩いた人がいました。シンガポールにも着物屋さんがあったとされています。ただし、生産は日本が中心だったと思います。朝鮮はあったかもしれませんが、生産は日本が中心だったと思います。

酒井　台湾では本当に日常着というかたちで着られていたので、恐らく駐在している日本人は高給取りだし、上層階級なので、それこそ三越などで買うようなキモノでいいと思いますが、一般庶民の手に入るようなものが売られていたというのは、おそらく日本人の顧客とは違うところかと思いました。

森理恵　日常着までなっていたのは留学生などだと思います。台湾や朝鮮で、庶民の日常着というところまでは、おそらくなっていないと思います。コスプレみたいなときに着たり、その程度だったとは思います。ただ値段の調査まではできておりません。そのあたりも調べたほうがいいと気が付きました。ありがとうございます。

後藤絵美　日本の象徴としてのキモノの登場というところが一つ重要な転換かと思いましたが、およそ第二次世界大戦の終わり頃と理解できるのでしょうか。それについてもう少しお話しいただければと思います。日本の象徴としてのキモノという意識が盛り上がってくるのはいつ頃でしょうか。

森理恵　盛り上がってくるのは1937年以降かなと思います。日中戦争の頃です。ただし、それより前にそういうものがないわけではないので、徐々にかなと思います。日中戦争期に、「政府の要人が家では和服でくつろいでいます」という新聞記事が出たりします。

それより前は、先ほどどこかの国の話であったかもしれませんが、キモノというのは遅れたものなので、政府の要人がキモノを着ているところは見せない。近代服である洋服を着て出てくるというのが明治以来、福沢諭吉以来の方針でした。ところが日中戦争のあいだに、急に政府の要人のキモノ姿の写真が出てくる。もちろん公の場ではなく家での様子ではありますが、出てきます。

国民服や標準服の制定のときも、いかに日本的な要素を入れるかが問題になりました。完全な洋服になってしまうと日本の国民服にならないので、いかに日本的要素を入れるかという議論も始まります。徐々にではありますが、日中戦争期とか、アジア太平洋戦争期とか、そのあたりで、「近代の超克」もありますよね。そういうなかで盛り上がっていったのかと考えています。

磯貝真澄　基本的なことをお伺いしたいのですが、キモノというのは晴れ着の要素が強くなればなるほど、着方を知らないと着られないと言いますか、着るのが難しいと思います。そういう着付けの仕方を教えるようなことが、朝鮮半島や台湾であったのでしょうか。あるいは日本の女学校だと、裁縫の授業で、みんな和服を縫えるようにという指導をしていたと思いますが、そういうところと比べて朝鮮半島や台湾で何があったのかということについて教えてください。

森理恵　私もよくわかっていませんが、台湾の女学校では和裁を教えています。生徒が台湾の人であっても和裁を教えて、そのなかからこういうものが出てくると思います。昔の着付けは現在ほど難しくはないです。当時は、日本にもないので、台湾や朝鮮に着付け学校はないと思います。

朝鮮で「朝鮮の女性にもっとキモノを着てもらおう」みたいな総督府の方針があって、朝鮮女性の意見

を聞いたら、「あれは着方が難しいから無理です」と言われたとかいう議論は雑誌にも出てきます。ただし、それが組織立ったかたちで「キモノの着付けを教えます」みたいな教室なり学校なりがあったということは聞いたことがありませんが、まだよくわかっていない状況です。

和崎　私はウズベキスタンが専門ですが、本務先で一般教養の日本の歴史も教えろと急に言われて、ライフワークで柔道をしているので武道を通して近代史を勉強して教えています。そうすると、満州事変以降に武道の盛り上がりが激しくなって、神社と武道が一体となって動いている感じがしたのです。鳥居なども台湾に建てていますね。日本の象徴としてのキモノが日中戦争以後とおっしゃっていましたが、神社の建設もそれぐらいに起こったのでしょうか。

森理恵　神社の建設はもっと早いんじゃないですか。釜山などには、すごく早くから神社ありますよね。神社の建設はもっと早いと思います。日本人が行くところには必ず神社を建てる。そういう研究の本がありますが、いつ頃からかは、すみません、私もきちんと憶えていません。

和崎　さまざまな文化的なものや宗教的なものが、段階的に輸出されているということでしょうか。

森理恵　でも、私はまったく知りませんでしたが、柔道の盛り上がりとは符号しますね。

和崎　そうですか。日中戦争というよりも、むしろ満州事変以降に、国策として大日本武徳会というものがすごく強化されていく感じです。

森理恵　『ジャワ・バル』にもたくさん武道が出てきます。剣道も柔道もやたらめったら出てきます。

和崎　ありがとうございました。